

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 6 年 6 月 12 日現在

機関番号：32641

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2020～2023

課題番号：20K21935

研究課題名（和文）明清時代壁画に見る庶民の思想についての研究 五台山台外宝蔵寺観音殿壁画を中心に

研究課題名（英文）A Study on the Ideology of Commoners Reflected in Ming and Qing Dynasty Mural Paintings: Focusing on the Murals of the Guanyin Hall at the Baozang Temple on Mount Wutai

研究代表者

篠原 典生 (Shinohara, Norio)

中央大学・総合政策学部・准教授

研究者番号：10882392

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,100,000円

研究成果の概要（和文）：中国山西省宝蔵寺観音殿壁画内容について検討を加え、それが施餓鬼を中心とした内容であることを指摘した。観音信仰や十八羅漢などの仏教的要素のほか、西遊記などの小説としてまとめられる物語的要素を加えて施餓鬼の功德を表現し、本尊には施餓鬼を受ける対象としての焰口餓鬼あるいは面燃鬼王が描かれていることを明らかにした。

また、宝蔵寺観音殿壁画の画面構成と日本の黄檗宗が伝える救拔焰口餓鬼陀羅尼経がなんらかの関連性がある可能性を指摘し、東アジア近世仏教信仰の交流の様相を考察するための資料ととして提供する。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は中国明清時代の寺観壁画の内容を多角的に考察し、東アジア近世仏教信仰の実像を明らかにしようとしたものである。中国山西省宝蔵寺観音殿壁画を対象にした研究では中国仏教の信仰内容の検討にとどまらず、日本仏教や民間信仰、明清小説などの領域から広く考察し、東アジア地域の民衆のあいだに広く共有されていた信仰について一定の内容を明らかにした。

特に施餓鬼についてこれまで知られていなかった新たな材料を提供することができた。

研究成果の概要（英文）：The mural paintings within the Guanyin Hall of Baozang Temple in Shanxi Province, China, have undergone scrutiny, revealing a thematic focus on service for the benefit of suffering spirits. Alongside traditional Buddhist motifs such as reverence for Avalokitesvara Bodhisattva and the Eighteen Arhats, these murals convey the virtues and rewards of charitable acts through narrative elements reminiscent of literary classics like "Journey to the West." The main image depicts the "Enkugaki" as an object that receives almsgiving.

Furthermore, a correlation is proposed between the composition of the mural paintings in the Guanyin Hall of Baozang Temple and the Dharani Sutra of the Gubatu-enku-gaki Dharani, a text passed down by the Obaku school in Japan. This observation suggests a potential avenue for exploring the interplay of Buddhist beliefs across early modern East Asia.

研究分野：中国考古学

キーワード：寺院壁画 施餓鬼 民間信仰 西遊記 救拔焰口餓鬼陀羅尼 観音信仰

1. 研究開始当初の背景

中国山西省五台山地区には唐や遼金時代の建築を含む多くの仏教寺院があり、建築史や仏教史、美術史など多方面からの研究が行われている。なかでも唐代や遼代の寺院壁画や塑像は作例の少ない貴重な作品として注目を集め、日本や中国、欧米の研究者らによって紹介され、研究されてきた。ただし、数が多く資料も豊富な明清時代の寺院壁画については、従来、時代の下る民間宗教として美術史や仏教史で取り上げられる機会は少なかった。しかし、中国の近現代仏教はこの時代を無視して理解できるものではなく、また同時代の多くの日本僧が五台山に参詣していることを考えれば日本近代仏教思想を正しく理解するためにもこの地域の宗教思想の様相を明らかにしておくことは重要である。また、最近の思想史研究では「口伝」の重要性が知られてきているが、寺院壁画はこれに直接的な思考材料を与えることができる。本研究は、文献からは読み取ることが難しい庶民の思想や信仰の様相を五台山明清建築壁画から読み解き、近世中国仏教思想を立体的に捉えなおそうとしたものである。

2. 研究の目的

(1) 明清寺院壁画の構造解明

本研究では中国山西省五台山台外宝蔵寺観音殿壁画を対象とし、壁画内容を読み解くことで壁画制作の背景となる当時の庶民の道德観や倫理観、人生観を明らかにする。壁画は三面に描かれ、それぞれが観音信仰を軸として相互に関連している。よって壁画をそれぞれ独立した平面として理解するのではなく、それが作り出す空間を建築構造の一部として把握することが重要になる。関連する中国史、仏教史、美術史等の研究成果に基づき壁画内容を分析し、その有機的結合を明らかにするとともに、本尊の尊格について観音信仰を手掛かりに探ることを目標とした。

(2) 調査研究における VR 技術の応用

考古学調査においては現地調査が原則であることは疑いの余地がない。しかし Covid-19 のような世界的な疫病の流行や戦乱によって長期間移動が制限され、調査がおこなえない状況があらわれてきた。また、VR 技術の進展により臨場感のある映像や画像を再現することができるようになってきている。本研究では UCL 考古学研究所と浙江大学の共同研究チーム (Shanxi Digital Documentation Project、略称 SDDP) の協力を仰ぎ、調査研究における VR 技術の応用について考察しようとした。

3. 研究の方法

(1) 研究計画の大幅な変更

2020 年初頭から全世界に広がった Covid-19 の影響により長期間にわたって厳しい行動制限が欠けられ、本研究も当初の計画から大幅な変更を迫られた。UCL と浙江大学の共同調査は中止され、プロジェクト自体も再開されぬまま終了となった。従って VR 技術の実証研究を実行する条件がなくなった。現地調査も調査対象が地方の小さな村であったことから本研究終了まで安全な調査の実行が確保できず、調査を断念した。しかしそのことで現地調査の代替方法としての VR 技術応用の重要性がより認識されたのは皮肉である。国内外の移動が厳しく制限された数年間、壁画制作の背景について多方面から考察を行った。

(2) 忻州市の寺観壁画の整理

本研究の基礎となった SDDP が 2019 年末までに調査終了していた山西省忻州市の寺院や廟などの壁画内容について整理・研究をおこない、特にいくつかの関帝廟壁画について場面ごとの内容比定をおこなった。

(3) 近世仏教信仰についての整理

明清時代の仏教信仰について、中国に限定せず東アジア地域全体から捉えなおし、明清時代の中国大陸から日本に伝えられた仏教の内容について整理した。なかでも隠元隆琦が伝え、日本仏教では黄檗宗として知られる一派が、当時の中国大陸での仏教信仰を探るうえで重要な存在であることを認識した。

(4) 東アジア近世仏教寺院建築の検討

近世に建てられた長崎唐寺と台湾の寺廟および中国大陸の寺院を比較検討し、この時期の東アジア世界の仏教信仰に一定の共通性があることを確認した。所謂「正しい」仏教だけではなく、「民間信仰」と言われる要素も仏教寺院内に取り入れられていることの意味を考察した。

(5) 宝蔵寺観音殿壁画の考察

宝蔵寺観音殿壁画の内容について東アジア近世の仏教信仰の角度から検討を行い、観音経以外に、宝巻、西遊記などの小説、救拔焰口餓鬼陀羅尼經などに基づいて設計された施餓鬼法要を行うための機能を持つことを考察した。

4. 研究成果

(1) 忻州市関帝廟壁画について整理し、壁画に描かれる場面が『関帝聖蹟図』や『三国志演義』等の文献とも完全には一致せず、また廟によって内容に多少の異同があることを明らかにした。

地名や人名などの記載にも異同が見られ、蚩尤が金牛となるなど、関羽の事跡が文字ではなく口伝（音）で伝わっていたことを示唆している。これは関帝文献の成立史を考察する際、どの段階でどのような変化が起こったのかを考察する上で参考となる。

(2) 宝蔵寺観音殿壁画の内容について、東アジア近世仏教信仰の角度から検討を加え、由緒ある仏教寺院の内部に、「民間信仰」とされる内容が表現されていることを明確に示した。観音経に基づく観音信仰の場面以外に、唐太宗入冥記や西遊記、目連救母など中国近世に流行した小説や宝巻の内容が多く含まれており、本尊も観音の化身であるとされた面燃鬼王の可能性を指摘した。

(3) 宝蔵寺観音殿壁画の構成が日本の江戸時代に制作された黄檗宗の救拔焰口餓鬼陀羅尼にあらわされている施餓鬼壇の構成と同様であることを指摘し、現在よく知られている「水陸会」系統とはことなる施餓鬼法要のかたちが存在していたことを示唆し、また観音殿が恒常的な施餓鬼壇として寺院内に置かれていた事実を明らかにした。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 篠原典生
2. 発表標題 明清時代のメディアミックス五台山寺觀壁畫の初歩的研究
3. 学会等名 「五台山仏教文化圏における文物の生成・継承・波及」第2回ワークショップ（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 篠原典生
2. 発表標題 山西省明清時代寺觀壁畫デジタル化プロジェクト調査報告
3. 学会等名 仏教芸術学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 篠原典生
2. 発表標題 「施餓鬼」にみる近世東アジアの信仰 宝蔵寺觀音殿壁畫から
3. 学会等名 比較文明学会
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------